

AsiaWave

vol.169

2

韓国写真館
金丸知好
ソウル

4

特集 あじあ航海記
KCブリッジ
金丸知好

8

THAILAND
★タイの政情不安について **そむちあい吉田**
★チエンラーイの山から **はとうゆきお**

15
LifeCulture
ロンマン・愛
医療としてEPPA
亜洲奈みつほ
映画 『七夜待(ななよまち)』
中川昌俊
中国 同国初の宇宙遊泳が成功
村田広幸
キャンドルモノコメント

13 シスターチャンドラ来日告知



とった写真を大きく伸ばしたりカラー
ターや皿にしてくれる。でもいくらポー
ズを決めても見本のよつな美人には
……
(はとうゆきお撮影)

チエンラーイの山から

はとうゆきお

今年もまた、北タイ、チエンラーイ県の山へ行ってきました。山地民の文化はますます影が薄くなり、平地のタイ社会に飲み込まれようとしています。そんな山の村からの報告です。

私が初めてヤオ族のL村を訪れたところ、そこには電気も水道もなく、夜の帳が下りると、村人は薄暗がりの中、三々五々と集まり、私にはわからないヤオ語でボソボソと話をしていたものです。

それが今では、各戸にTVがあり、携帯電話も普及し、誰も民族衣装を着なくなってしまうました。とても寂しい気がしますが、それは旅人の身勝手な懐古の念(ノスタルジー)でしょう。

十五年くらい前、「TV局に就職が決まりました。私の夢は、カメラマンになって世界中の文化を紹介することです」という大学生を、私がこの村へ連れてきたことがあります。

(11ページにつづく)

金丸知好の
韓国写真館

ソウル



大韓民国の首都、ソウル。
ソウル、とは日本語になおすと「都」の意。
都、という名の、首都が置かれた町ということになる。
この都は日本からも気軽に訪れることができる。
たまに「外国にいる気がしない」という錯覚を起こさせる。
そんな居心地の良さが、ソウルにはある。



しかしそんな都も、時には厳しい顔を見せることも。歴史認識にからむ、日本大使館前での反日デモに出会ったこともあった。また、北朝鮮との休戦ラインから100キロと離れていない都でもある。その北から中国経由で逃れてきた「脱北者」の人たちや金日成主席（当時）と会うため北に渡った牧師の奥様の話もきいた。ソウル。それは朝鮮半島の近現代史をいまなお映し続けている都である。



あじあ
航海記

KCブリッジ

金丸知好

釜山。おそらく僕の人生で最も訪問回数が多い海外の都市だろう。しかも1回を除けば、あとはすべて船で訪れている。

初めて釜山に行ったのはちょうど20年前。僕は大阪から瀬戸内海を航行し、関門海峡を越え、玄界灘を渡って船上から釜山港を眺めた。

そのときの船の名前は「オリンピック88」。もともとは日本カー・フェリーという会社の「おおすみ」として大阪と志布志（鹿児島県）航路に1980年にデビュー。志布志航路が廃止された82年に東神戸と日向（宮崎県）に配転したが、僕には日本時代の記憶は全くない。

その後、86年に「おおすみ」は韓国に売却されオリンピック88になった。ソウル五輪と開催年（1988年）にちなんだネーミングであることは明白で、デッキの後部に聖火台とトーチのイミテーションがあった。ちょうど瀬戸大橋が開通した頃の頃で、それをくぐる船のデッキから感慨を持って橋梁を見たことは今でもはっきりと覚えている。

このオリンピック88、数年後に姿を消した。大阪と釜山航路が大赤字で消滅し、オリンピック88もどこかに売却されてしまったようであった。

ところが、思わぬところでこの船と再び

会を果たす。1995年、僕は中国・山東半島の先端にある威海（ウェイハイ）から韓国の仁川に渡るべくフェリーに乗船した。

その名は「ニュー・ゴールデンブリッジ」（中国名は新金橋号）。この船に乗って最初に感じたのは「初めての船のはずなのに、なんだか懐かしさを覚える」というデジャヴ感。実はニュー・ゴールデンブリッジ、かつてのオリンピック88だったのである。

その後、C&フェリーという韓国船社がニュー・ゴールデンブリッジを購入し、やはり韓国と中国を結ぶ航路に投入。船

名も韓国（KOREA）と中国（CHINA）を結ぶ架け橋、すなわち「KCブリッジ」へと変更された。

そして今年、日本生まれのこの船は、オリンピック88以来久しぶりに日本に姿を現すこととなった。6月21日に釜山と福岡県門司を結ぶ「モジライン」が開設され、その航路にKCブリッジが投入されることとなったのである。日韓航路なので船名はKOREAとJAPANの架け橋「KJブリッジ」へと変更されるべきだと思うのだが、名前はKCブリッジのままだった。

オリンピック88に再び会える。7月に釜山に出かけた僕は、それだけでKCブリッジを日本への帰路の足に選んだのであった。

釜山を出港したのは21時45分頃であらうか。KCブリッジは、まもなく墨を塗



僕が眠った1等室。ベッドが8つ。窓付き。玄関で靴を脱いでベッドスペースに行くことになる。ベッドが8つあるにもかかわらず、門司港到着までひとり使った。これで片道90000円。



ここが「オリンピックホール」。2階と吹き抜け構造になっている。今回の航海で利用されることはなかった。オリンピック88、ニュー・ゴールデンブリッジ時代にはなかったスペース。



乗船したらまずはカウンターでチェックイン手続きを。日本語を話せる韓国女性スタッフが対応する。ちなみにKCブリッジの乗組員は、全員韓国人で占められているようだ。



KCブリッジに限らず、韓国船籍のフェリーには必ずあるコンビニエンスストア。開店と同時にレジには長蛇の列が。コンビニにある商品は韓国内のコンビニで売られているものと一緒。食品を中心にかなり豊富な品ぞろえ。すべてウォン表示で、カップめんは1000ウォン（およそ110円）だった。



13年前、ホソヤんとコーヒー飲みながら韓国の旅行計画を立てたカードルームはギフトショップになっていた。釜山→門司の航海中はずっとクローズのまま。さっぽろラーメン・喜多方ラーメン・讃岐うどんなどがディスプレイされていたが、翌朝にはすべて片付けられていた。



これがおつまみセット。釜山→門司のレストランメニューは、生ビール×1 = 3000ウォン・生ビール×2 = 6000ウォン・おつまみ = 3000ウォンの3種類のみ。定食などしっかりお腹にたまるものの販売は行っていない。だからコンビニが大繁盛するわけだ。



船尾にあるレストラン。13年前もここはレストランだった。僕はそこでの体験を、こう、日記につづっている。夕食の時間となったので、食堂に行った。食券を買って、セルフサービスで食べる。ウォンが米ドルで支払う。中国元はもう使えない。厨房のスタッフも韓国人だったので、少しだけ覚えた韓国語で注文し始めたところ、僕の横にいたオバサンが「日本語で言って下さい!」と日本語で言う。そこで日本語でオーダーすると、そのオバサンが韓国語に翻訳してくれた。僕の韓国語が、あまりにもひどかったらしい。キムチや韓国のりをベースにした、いかにもという定食だったが、脂っこい中華に疲れた胃には、とても新鮮であった。

りたくったような夜の海峡に乗り出す。1等室の前を走る廊下を直進するとコンビニ、ギフトショップ、免税店、そしてつきあたりにレストラン。ここはいわばKCブリッジのメインストリートである。コンビニがオープンすると、待つてました!とばかりに韓国人乗客が店内に殺到。彼らが手にしているのは韓国製カップめん、そして缶ビールや焼酎、チップスなどのおつまみ。これらを買った人々は船尾にあるレストランへ直行!カップめんを缶ビール片手にすすりだす。出港が遅いこともあって、皆さんお腹がかなりすいていたようだ。

まみセットを注文。トータル6000ウォン(約700円)なり。韓国人客がコンビニ商品ばかり買って、レストランはそれを消費する場になっていたことでヒマそうにしていた韓国人女性スタッフに食券を渡す。やっとお客さんが来た!とばかりに笑顔になった彼女は「カムサハムニダ(ありがとうございます)」

といて、サーバーから韓国製生ビールをつぎ、ラップがかかったおつまみセットを出した。韓国海苔と乾き物3品。なるほど、おつまみです。

後方に遠く釜山の灯がみえる窓際のテーブルにこれらを持っていき、13年ぶりの元オリンピア88との再会を祝ってひとり乾杯。

いや、実は自分のためだけの乾杯ではない。

いまから13年前、ちょうど戦後50年目

の8月。僕は3人の仲間とともに神戸から燕京号という船に乗って中国大陸を目指した。天津に到着するとそのまま大連行きのオンボロフェリーに乗り換え。大連から特急列車で瀋陽、バスで長春、ハルビンへ。再び大連に戻ってきたとき、神戸を船出した4人は2人になっていた。2人は日本で用事があるので帰国したのだ。

残ったひとりが「ホソヤん」と呼ばれたフリーカメラマンである。彼とは実は、2ヶ月前に知り合ったばかりであった。その年6月の戦後50年・南太平洋クルーズの船上で。

東京を出港したウクライナ船籍のカレリア号はチュウク(トラック)島、ガダルカナル、ラバウル、パラオ、那覇、神戸とまわり、出港から20日後に再び東京に戻ってきた。ホソヤんはこの船に乗るために仕事を辞めたという。

南太平洋のかつての戦場をめぐったホ

ソヤんたちと意気投合した僕は「南にいったんだから次は北、そうだが、旧満州に行ってみようじゃないか!」と船仲間たちと語らって、8月中旬に4人で神戸から中国に向かって船出した。

仲間が減っても、ホソヤんと僕の旧満州ヤジキタ道中はさらに続けられた。大連からバスに乗って、鴨緑江という川を隔てて北朝鮮・新義州に隣接する国境の町・丹東へ。いまは容易には行けなくなってしまった対岸の国にある町が、ホソヤんの母上が生まれた地だったことを聞かされた。

丹東から鉄道に乗って1泊2日、山東省の中心地・青島へ。そして青島からバスに乗って山東半島の先端に位置する威海へと移動。当時、中国から黄海を横断して韓国に渡る船便は威海からしか出ていなかった。ここで仁川行きニュー・ゴールドデンブリッジの2等室チケットを



太極旗がはためいているあたりに、かつては聖火台とトーチがあった。早起きした韓国女性が航跡を眺めていた。



門司港に入港したKCブリッジ。門司到着は7時30分過ぎ。定刻は8時30分となっているので1時間も早い。しかし入管の都合で下船はやはり8時30分。それまでは船内で待機。ユニークなかたちをした海峡ドラマシップのすぐ近くにあるプレハブの白い建物がターミナルで、ここで税関・出入国検査・検疫(CIQ)すべて行われる。



門司を出港するKCブリッジ。1万6340総トン、定員は542名。1980年に建造されたベテラン船ということもあり、リフォームを施した内装こそ立派だったが、やはりあちこちくたびれている印象を受けた。

実に1ヶ月ぶりの日本の土を踏んだのであった。こんな奇想天外な旅はもうホソヤんとはできない。なぜなら6年前の春、彼は天国に旅立ってしまったからだ。ホソヤんとニュー・ゴールドデンブリッジに乗った1995年といえば、日本人メジャーリーガーのパイオニアとしてロサンゼルス・

110米ドルで買った。ニュー・ゴールドデンブリッジに乗り込んだ瞬間、僕は妙な気分になられた。初めて乗る船のはずなのに、懐かしい感情がこみ上げてくるのだ。船尾にあるデッキに出た。このデッキもどういいうわけか、初めてじゃないような気がする。その答えはこの船上で出会った、日本語が達者な韓国人オフィサー・車(チャ)さんのひとことで氷解する。「この船は、もともとオリンピック88だったんですよ」僕はこの7年前、1988年2月に大阪からオリンピック88で初めて韓国を訪問している。このことを車さんに話すと、彼はにっこり微笑んでこう言った。「あなたが乗ったときにも、私と顔を合わせているかもしれないですね」

僕は、一気に生ビールを飲み干し、コンビニに走って行って韓国製缶ビールと、これまた韓国製ポテトチップスを買う。すっかりアルコールが脳にも浸透し、13年前の記憶が次第によみがえってくる。免税店は当時も存在していた。ところが船内の基本通貨は韓国ウォン。中国を約1ヶ月にわたって旅してきた僕もホソヤんもウォンなど持ち合わせていない。これではロビーの自販機にある韓国ビールもジュースも飲めやしない。2人は困り果ててしまった。すると、横を通りかかった船員が「どうかしましたか」と、これまた日本語で話しかけてきた。彼は「新金橋号」で働いている中国人青年だったが、日本語を

勉強していたのでわれわれの話も理解していたのであった。「この船では特別に両替サービスはやってないけれども、この免税店でドルをウォンに換えることはできますよ」と教えてくれた。僕たちは免税店で100ドルを7万ウォンに換えてもらった。後で知ったのだが、これは韓国のホテルや銀行よりもいいレートであった。免税店の隣にあるギフトショップはニュー・ゴールドデンブリッジではカードルームだった。ここではコーヒーのサービスも行われていた。僕の当時の日記には、こうある。

オリンピック88で釜山に渡ったときは2等洋室、つまりベッドルーム利用だった僕だが、ニュー・ゴールドデンブリッジで仁川に向かうときは「僕らの今晚の宿は船底の広々としたサコ寝スペース」と日記に書いている。船底の広々とした、といえばKCブリッジのオリンピックホールしかない。いまはイベントスペースとして使用されており、客室としての機能を果たしていない。ただ、「オリンピック」と、かつての船名だけはこのホールに残されている。翌朝、仁川に入港したニュー・ゴールドデンブリッジを下船したわれわれは、徒歩15分のところにあつた東仁川駅から電車でソウルに向かった。ソウルで1週間を過ごし、特急列車セマウル号で釜山へ。そしてそのまま関釜フェリーで下関に。

ドジャースの背番号16をつけた野茂英雄投手がトルネード旋風を巻き起こした年でもあった。僕たちが中国に渡ったときは、その旋風がまさに最高潮に達していた時期であった。

韓国人オフィサーの車さんは親切な方で、僕たちがこの1ヶ月間日本を離れていることを知ると日本のニュースを何か知らせたいと思って、こう言った。

「ノモさん、この前勝ちました。やっ」と1勝目です。1ヶ月間勝てなかったのです」

その野茂投手も、ちょうど僕が釜山に滞在している今年7月に引退を表明した。僕はこのニュースを釜山のホテルで知った。

「ホソヤん、ノモも引退だつてさ。もうそんなに歳月が流れたんだな。でも、トルネード旋風の年に韓国まで乗った船は名前も変わって、あちこち古さも目立っているけどまだ現役だよ。歳月は流れて変わるものもあれば、変わらないものもあるんだな」

僕は心の中で天国のホソヤんに語りかけながら韓国製の缶ビールをグイッと飲み干した。

深い眠りからバツと呼び起こされた。窓の外から朝日が差し込んでいた。時計を見るとまだ午前5時になったばかり。船尾のプロムナードデッキから払暁の海を眺める。

太極旗（韓国の国旗）がはためいてい

るあたりにオリンピック88そしてニューヨーク・デンブリッジ時代には聖火台があった。僕の日記にはホソヤんが

「これと一緒に写真とつてよ」と、デッキに飾り付けられていたソウル・オリンピックの聖火台を見つけて、はしゃぐとある。

残念ながら聖火台はKCブリッジから撤去されてしまっていた。しかし、ソウル五輪から20年、今年には中国で北京五輪。アジアでのオリンピックイヤーに再びこの船に乗り合わせる縁の不思議さを感じ。

KCブリッジはオープンしたばかりの門司港に入港する。そして釜山に向けて折り返し11時30分に離岸、再び関門海峡を越えていった。

「こんどはいつ会えるかな」

1988年のオリンピック88、95年のニューヨーク・デンブリッジ、そして今年KCブリッジ……三度の乗船はいずれも名前が異なるけれど、すべて同じ船。再会の念をこめて見送った。

それからおよそ1ヵ月後。KCブリッジはエンジントラブルを起こした。この一隻のみで対馬海峡を往復運航していたモジラインは、航路開設からわずか2ヶ月の8月25日から運休を余儀なくされることとなる。まもなくモジラインから次のような発表が行われた。

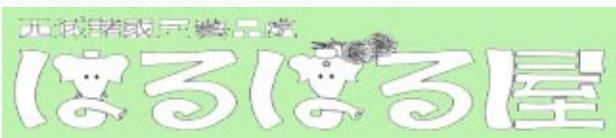
このたび、既存の就航船（KCブリッジ）に替えて船齢の若い新たな船を投入

し、10月から運航を再開することとなりました。

船としてはすでに老齢とも言える28歳のKCブリッジは、モジラインからお払い箱にされてしまったのだ。船齢も船齢だしエンジン故障から回復の見込みはない、と判断されたのだろう。エンジンが壊れるまで日本、韓国、中国そして再び日本に戻って走り続けた船は、その生涯を燃え尽きるようにして終えたのだ。

僕は思い出の船に別れを告げるために、あの7月の晩、釜山から門司までKCブリッジに乗ったのかもしれない。

インド・ネパール・アフガニスタン・バリなどなどからはるばるやってきた衣料品・織物・アクセサリ・楽器・CD・DVD……が皆様をお待ちしております



<http://www.harubaruya.com/>

180-0004 武蔵野市吉祥寺本町 1-8-3 コスモビル 2階

Phone & Fax. 0422-21-4790

渋谷アムリタ Phone & Fax. 03-3461-6563

吉祥寺別館 Phone & Fax 0422-22-2433

☆はるばる屋通信☆

インド・バリからオリジナル秋物衣料品
続々入荷中です。

10月25日(土)、26日は代々木公園で
"アースガーデン"に出店します

★10月の軽井沢店は土、日、月のみ営業です★

ベリーダンス、インド舞踊のイベントに
商品を持って参加いたします。ご連絡ください。

ネットでのお買物もお楽しみください！

金丸知好（カナマルトモヨシ）

富山県生まれ。早稲田大学在学中に神戸から上海へ「鑿真号」で渡って以来、船旅のオモシロさにはまり、日本国内や韓国・中国・台湾・ロシアなど外国行きのフェリーに乗船すること多数。稚内からフェリーで訪問したサハリンの見聞録「北緯47度の忘れ物」で徳間文庫10周年記念ノンフィクション大賞を獲得し、以後、船旅をベースにした「航海作家」活動に入る。クルーズ客船で五大陸と五つの海洋をめぐった経験を生かし、雑誌「クルーズ」（海事プレス社）で「世界の港町、歴史海道をゆく」を連載。また、単行本「アジアフェリーで出かけよう！」（出版文化社）、「フェリーでGO! オモシロ船旅～日中韓露台」（ユビキタ・スタジオ）の執筆、船旅専門ブログ「航海作家カナマルトモヨシの船旅人生」運営など、船旅に対して情熱的にオモシロ活動中！

船旅専門ブログ「航海作家カナマルトモヨシの船旅人生」

<http://rohnin1966.at.webry.info/>

（緊急寄稿）

タイの政情不安について

そむちやい吉田

バンコクが何やら騒がしい。日本でも民主主義市民連合（PAD）による首相退陣要求のデモ活動と反独裁民主主義同盟（同盟）との衝突などが放送され、微笑みの国はにわかには争乱の国になってしまっているかのようだ。この影響でタイへの旅行をキャンセルや延期した人も少なくないという。もちろん、安全を考慮すればそれも致し方ない事と言えるのだが、バンコク市内は、デモが展開されている首相府などを除けば、至って平静だ。

3年前のクーデター、さらには1992年5月の血の惨劇のさなかであっても、争乱の起きている現場以外ではバンコクは平静だった。今回も今のところ、そして今後も普段の市民生活や観光旅行には大きな影響はないと思われる。もしも、近々に旅行などで現地を訪れる計画を躊躇している人は、以下の注意さえ忘れなければ、問題なく旅行できるだろう。

さて、サマック氏の失職にともなう9月17日新たに首相に指名されたのは、国民の力党副党首であり、サマック氏失職後暫定首相を務めていたソムチャイ氏

だった。指名が確定するまでには、対抗馬として名前が挙がっていたのはソムボン氏とスラボン氏だった。個人的にはソムチャイ首相になったことは、同名のよしみもあって多少応援したくなる。いきなり話が脱線して申し訳ないが、どの名前も一昔以上も前の古い名前だとタイ人から聞いている。つまりは、タイの政治もそう言う世代の人が中枢にいるということだ。

◆現在に至る流れ

今回の争乱で、PAD側が要求しているのはサマック首相の退陣と議会の解散総選挙。ご存知の通り、サマック首相が憲法裁判所によりその職を剥奪された。その後9月17日には、新たに国民の力党の副党首だったソムチャイ氏が首相に指名された。残る要求は解散総選挙のほすだが、ソムチャイ氏がタクシン氏の義弟であることを理由に、信頼できないとして、タクシン色の一掃を求めている。

この混乱はタクシン元首相による不正利益供与に関する疑惑が持ち上がった事

に端を発している。しかし、この不正疑惑を初めに指摘、追求したのは現在PADでもリーダー役のソンテイー・リムサタン氏だ。彼は元々新聞社のオーナーであった。その紙上でこの疑惑をスクープし、政府からの圧力がかかるルンペン公園に於いて、一人で抗議演説を連日繰り返した。これが2006年初頭のことだ。その4月に総選挙が行われたもののソンテイー氏によるポイコットの呼びかけに民主党など野党が応じて、結果的に無効となった。国王の意向もあり、10月に再選挙が行われる予定だった目の9月19日タイ陸軍によるクーデターが発生し、軍部主導のもと1年間の暫定政権が発足した。2008年になり行われた総選挙であったが、軍主導の暫定政権が何も打開策を打ち出せなかった事に失望した国民の多くは、タクシン派の復権を選ぶという結果になった。

さて、PADに至る反政府派の中心とされるのはソンテイー氏であるが、もう一人のリーダーがいる。それが元バンコク都知事チャムロン・シームアン氏だ。彼の名前を国際的に有名にした事件が、1992年の民主化要求デモだ。この時は多くの血が流され、タイ国史上「血の惨劇」として今でも語りぐさになっている。1991年にやはり軍部のクーデターが起き、スチンダー將軍が当時の首相を解任し、自らその椅子に着いた。その行動に、当時既に勃興し始めていた中流階級を中心に抗議活動が発生。チャム

ムロン氏がリーダーとしてデモの先陣を切っていた。激化するデモに対して堪えきれなくなった軍が、民衆に向け発砲、数百人が死傷するまでになってしまった。直後、プミポン国王が仲裁に入り、チャムロン氏とスチンダー將軍二人を王宮に呼び出し事態は収拾したのだ。その後、チャムロン氏は自らの政党を率いていたが、政権は民主党が長く握っていた。チャムロン氏が率いていた政党で頭角を現したのがタクシン氏だ。現在に至るタクシン派糾弾の中心にいるチャムロン氏は、もともとタクシン氏の師というべき存在なのだ。

2000年に行われた総選挙では新党「タイ愛国党」（タイ・ラック・タイ）を結党。300議席を大幅に超えて獲得し、ほぼ独裁状態になった。タイの首相の任期は8年。タクシン氏は、その1期目には麻薬撲滅運動や社会保障、貧困者向け医療保養制度など画期的な政策を次々と打ち出し、ビジネスマンとしての面目躍如たる功績を次々と上げていった。その勢いは、タイに治まらずアセアンのリーダーとして世界中から注目されるに至ったのである。このころまでチャムロン氏とタクシン氏の師弟関係はまだ良好であった。しかし、南部地方での失政や2期目に入ってから数に任せての強引な手法に嫌気がさしたチャムロン氏は、タクシン氏から離れていった。その後、ソンテイー氏に同調するようになったのである。

歴史的対立

- ・ 為政者 vs 庶民
- ・ 政府 vs 軍

タクシン氏が職を追われてから、国民の間で密かにささやかれた噂がある。タイ愛国党（タイ・ラック・タイ）の主要メンバーが結党前に北欧の一国に集まり、密談が行われた。その内容にタイ国民は驚愕したが、現在でも半信半疑で捉えている。それは王室の廃止と大統領制の導入を最終目標とするというものだった。しかし、これが事実であったならばかつての師チャムロン氏が離れるだけでなく、徹底的に追及しようとする姿勢にも納得がいく。

◆複雑な対立構造

さて、PAD対政府（首相）という今回の対立だが、実は内状はかなり複雑だ。（別に首相を擁護するわけではないのだが）それだけにサマック前首相も解決に窮していたのだろう。この対立の構造をできるだけわかりやすく整理してみる。

表面で見えている対立

- ・ 首相 vs PAD
- ・ タクシン氏 vs ソンタイ氏 & チャムロン氏

見えざる対立

- ・ 都会 vs 地方
- ・ 貧困層 vs 富裕層
- ・ 新勢力 vs 旧勢力
- ・ バンコク vs 南部
- ・ 仏教 vs イスラム教

今回の対立が複雑なのは、上に挙げた様々な対立が絡み合っているからだ。ただ、ここに入っていないものの今のタイに必要な不可欠なものがある。王室と民主主義。王室と対立しようとする勢力は、今のところ少ない。少なくとも現国王が存命で執務している間は、無いと断言していいだろう。民主主義については、意見が分かれるだろう。なにを基準にするか、そもそも円満な民主主義など世界中まだどこにも実現していないのだから。しかし、今回は民主的な選挙で選ばれた首相を、非民主的な手段で追い出そうとしており、そうなる軍によるクーデターと何が違うのか。結果が出てみないとその答えは出ないだろう。

・ 都会 vs 地方

これは貧困層 vs 富裕層とかなりダブっている。まさに格差の対立といえる。実は、これは1992年にも同様にあったのだが、その時には富裕層というより当時勃興していた中間層が中心だった。今回、その中間層のほとんどは争乱を一步引いて見ているようだ。しかし、先日ラムカムヘン大学の学生が襲撃されたから、学生達がPAD側に付き始めている。この流れが大きくなれば、血気盛んな若者のことなので中間層を巻き込み、1992年のような事態に発展する可能性は否定できない。

・ 為政者 vs 庶民

タイの為政者は軍政の時代から今に至るまでも、仏教と王室を国民をまとめるために使ってきた。今のタイは日本と同じ立憲君主議会制民主主義なのだが、王室に対しては不敬罪があり、何も発言する事が許されていない。また、仏教への信仰も、穏やかではあるものの揺るぎなく堅固に守られている。歴史的に見れば、

・ 政府 vs 軍

これは貧困層 vs 富裕層とかなりダブっている。まさに格差の対立といえる。実は、これは1992年にも同様にあったのだが、その時には富裕層というより当時勃興していた中間層が中心だった。今回、その中間層のほとんどは争乱を一步引いて見ているようだ。しかし、先日ラムカムヘン大学の学生が襲撃されたから、学生達がPAD側に付き始めている。この流れが大きくなれば、血気盛んな若者のことなので中間層を巻き込み、1992年のような事態に発展する可能性は否定できない。

その思考自体も為政者によって上手に植え付けられたものと言えるのだが、これは決して悪い面だけではないことは、タイ人の穏やかさとして体現されていることからおわかりいただけるだろう。しかし、この辺もそろそろ限界が来ているのかも知れない。全てのタイ人が現国王亡き後を不安に思っているというのも、対立に密かな悲壮感を加えている原因ともいえる。

今現在、軍は中立、不介入を守っている。それはタクシン氏と同期のアヌボン陸軍司令官は、反タクシン派だからだといわれている。しかし、安易に軍が出てしまうとタイがやっとなり築き上げた今の位置が瓦解する恐れがあるということをよく理解しているからだろう。この点は政府も同じなのか、暴力に訴えないことは、評価されても良いかも知れない。少なくとも「やくめた！」と立て続けに放り出してしまふ某国の首相よりずっと気骨がある。ただし、事態がこじれた場合、タクシンシンパも多い軍も一枚岩ではないことから、司令官を出し抜いてのクーデターも可能性は否定できない。

◆これからのタイ

今まさにタイが本場の民主主義を手に入れようとしているのか。それとも何か違った形のものであがるのか。恐らく今のタイ人にもわかっていないのでは

この対立は、タクシン氏に利権を奪われた旧勢力が、2006年のクーデターにより一時的に勝利した。しかし、暫定

ないだろうか。一つだけだけ両者に共通するものは、国王への信望。その国王は高齢であり、内心はじくじたる思いで状況を見守っているのだろう。その思うところは常人には計り知ることは出来ないのだが、多分そろそろ王室をあてにせずとも国民自らの手で乗り越える力を付けて欲しいと願っているのではないだろうか。今後、事態がどう推移するのか。正直誰にも予測はできない。なぜタクシン氏が未だにこれほどの支持を集めるのか。なぜタクシン氏はこれほど弾劾されるのか。ここはタイ国民全体が、一度タクシン政権の功罪を冷静に見つめ直さないといけないのだろう。

タイ旅行を検討中の参考になればと思いい、私自身の体験を付記しておこう。

〈1992年5月の体験〉

15年前。わたしが初めてタイを旅行したのが、1992年5月だった。その頃はネットも無く、タイに関する情報は地球の歩き方とロンリープラネットくらいだった。ほとんど何の予備知識も無く、当然当時の政情など全くわからないままに訪れたのだ。ゴールデンウィーク明けからバンコクに滞在。ネパールへ1週間ほど出かけて、また戻って来た。その頃にはパッポン通りのバーには知り合いの顔が何人かできていて、毎晩夜明け間近まで飲んでいた。

そんなある日（恐らく17日だったと思

われる）、4時頃までやっているはずのバーが0時に店じまいを始めた。一体何事かと訊ねても要領を得ない。当時のわたしは当然、タイ語は話せないし、タイ人も片言の英語だ。彼らは「ボクシング！」と言うだけだった。不承不承に引き上げながら、よもや同じ市内の一角で流血の惨事が起っているとは思ひもしなかった。とんでもない事が起きていたのを知ったのは、パタヤに移動した後だった。ゲストハウスのテレビで初めて見たプミポン国王の前にひれ伏す二人。宿の従業員が事の仔細を教えてくれた。その日に至るまでタイ全土には報道管制が敷かれていて、テレビなどではデモや惨劇についての情報は流されていないはずなのだが、彼らは全てを知っていたことも印象に残っている。デモには参加していなかったが、常に関心を持って注視していたという。その一方で、あれはバンコクの事、こっち（地方）には関係無いと無視を決め込む人もいたが少数派だった。バンコクでもそうだったが、パタヤでも夜間の外出などに規制がかかっているとは思えなかった。戒厳令が出されてきた事自体を知らなかったというところが、特に注意していなかったためだろうが街中で軍服の軍隊を見た記憶も無いのだ。結局この時は、ひと月ほど滞在して、インドネシア（フリーピン）と廻って帰国したのだが、惨劇の詳細を知ったのは帰国後しばらくたってからだった。

わたし自身のこの経験と2006年の

クーデターの様子からもいえる事は、争乱の現地以外では全く普通の暮らしがあるということ。旅行者にとっても、わざわざそこへ行かない限りは問題なく廻ることが出来るはず。また、現地の知り合いや友人が心配な方もいるだろうが、彼ら自身がデモに参加していない限り、心配はいらないだろう。もし、周りに行く事を迷っている人がいたら、少しだけ注意すれば何も問題ないとお伝えいたきたい。逆に旅行者が減っている今はかえって予約も取りやすいし、チャンスといえるかも知れない。

◆バンコク旅行時の注意

PADと同盟の衝突によって死傷者が出たことを受けて、9月2日に発令された非常事態宣言だったが14日に解除された。しかし抗議活動が展開されている間は、在タイ日本大使館や各情報系のサイトなどで最新情報をチェックして、以下の施設周辺には近づかない事をおすすめする。

- ・首相官邸とその周辺（ラチャダムヌン通り）
- ・民主記念塔
- ・王宮広場周辺
- ・首都警察本部（ラマ1世通りセントラルワールド付近）
- ・ペブリ通り（NBT支社周辺）
- ・ウイパワデーランジット通り（NBT本社周辺）

カオサン通り周辺も政府の施設に近いために行動には十分に気をつけて下さい。

また、対抗する二つの組織は黄色（PAD）赤（同盟）のシャツを来て活動していますので、それらの色の着衣も避けて下さい。

なお、南部で展開されているデモ活動は空港が中心になっており、プーケット、クラビー、ハジャヤイ、スラータニなどで占拠、閉鎖と言った混乱が起きています。鉄道も南部方面行きは運行されていません。模様。残るはバスでの移動ですが、安全面からこの方面への旅行は、必要不可欠な場合を除きおすすめてできません。行かれる際には旅行会社、タイ航空、タイ政府観光庁などで最新の情報をチェックする事。

そむちやい吉田（そむちやいよしだ）

フリーライター

著作：大人のタイ極楽ガイド、大人のイラスト会話集トラベル（実業之日本社）ばいりんまるタイ語（ポプラ社）

1999年より7年間バンコクで暮らす間に結婚し、現在は東京で単身出稼ぎ中。一日も早くタイに戻るのが願い。タイ庶民音楽ルークトゥン・モーラムについての第一人者。7月に早稲田奉仕園で初めての講演会が開催された。

ブログ：サラブリーのみまわり畑

<http://kaonom.seesaa.net/>

ルークトゥン・タイランド！

<http://loogthungthailand.seesaa.net/>

紀行
チエンラーイの山から
はとう ゆきお

(承前) そして五年ほど前、この村が「ウルルン滞在記」で取り上げられました。その時には、女優の故・岸田今日子さんが一週間ほど泊まっていた。おそらくあの時の大学生の夢がかなって、「ウルルン」のスタッフとなり、この村を紹介したのでしょう。それ以外に、観光ルートからはずれたこの村と、日本のマスコミの接点なんてありませんから。「夢は見るもんじゃない、叶えるもんだ」って歌がありましたけど、本当、そうですよね。

その後、私が岸田さんに手紙を書いて、村の過去と現在について詳しくお話ししましたところ、岸田さんから返事をいただきました。あんな大女優から返事をもられるなんて、感激でした。



チエンラーイの踊り子



チエンマイの寺によくいる怪獣



キンキラキンのお寺が多い中で、ここはシブくて良かった

も来なくなり、衣装を着るのは正月や儀式の時だけになってしまいました。

L村からメーサローン村へ行く途中にある、同じヤオ族のP村では、かつては民族衣装の娘たちがぞろぞろといて、土産物を買っていました。それがもう、村には若者の姿がありません。というより、人影すらまばらになっています。村の中央の道沿いに建てられた土産物を売る小屋にも、お婆さんが二人いただけでした。

ちなみに、村の名士だった李進貴(リー・チンクイ)氏も、ずっと前に亡くなりました。氏は、日本人による照葉樹林文化の研究において、ヤオ族の重要な語り部になった人です。

メーサローンの手前にあるアカ族のS村は、民族衣装の人々でこった



チェンマイの名花スタンリーのステージ



返していることで有名でしたのに、みんな町の人と同じ服装になってしまいました。タイでもラオスでも、アカ族はあの重い被り物をやめて、赤白の格子縞の布を頭に巻くだけです。この変化は急に起こりました。彼らは彼ら独自の情報網で、国境を越えてつながっているようです。さらに、どこかの村からも、若者の姿が消えてしまいました。そのわけを聞いてみると、「タックシン前首相の経済政策が功を奏して、北タイの景気が良くなったので、若い人たちが平地で仕事を見つけれられるようになったんです。もう、あてにならない観光客相手の土産物売りなんて、しなくても良くなったのですよ。」と、いうことでした。もちろん、タックシンの政治姿勢については、地元でも極端な賛否両論があります。チェンマイの著名な歌手、スタンリー・ウェーチャーノン女史のライブに行くと、反タックシン集会で演説する自分の写真を、会場（自分が経営するレストラン）に、大きく掲げていました。なんせ巨大な利権で私腹を肥やし、貧困層へのバラ撒き政策で票を集め、そのために政府の財政を破綻させた人ですからね。



普遍的な人間の価値をダリットの人々にみるシスターチャンドラ

南インドのおどるシスターが「社会貢献賞」の受賞で初来日

インドにはタッパーと呼ばれる、死を知らせるための太鼓がある。長い歴史を持つこの太鼓は、不可触民とされたダリットと呼ばれる人たちの、苦しみと痛みが深く刻まれた太鼓だ。この太鼓を女性が手にし、女性自身を解放するための新たな武器として、新しい命を与え、同時にその響きによって、沈黙させられてきた女性たちに言葉と勇気を与えるものにかえたのが、南インドタミルナドゥ州のディンディガルの地で、1993年以来15年以上にわたって社会の底辺の人々につくしてきたシスターチャンドラである。彼女が今年2008年社会貢献賞を、社会貢献支援財団から受賞することになったのを機に、来日することとなった。

シスターチャンドラは忍耐と愛と笑いと芸術をもって、若い女性たちが自分の足で立ち、他の人をも導くことができるようなリーダーとなるべく、その養成を行ってきた。不可触民といわれたダリットの女性リーダーを養成するシャクティセンター集会室の、ある日の黒板にはこのような文章が、かきだされていた。

ここにみながつどおう。

歴史はかえられる。

内なる力を感じよう。

シャクティ（力）をもって、歩みをすすめよう。

目覚めよ。

共につどおう。

おそれるな。

社会の隅におしやられた少女たちが、シスターチャンドラがつくったシャクティセンターにつどい、内なる力を鍛えられ、差別に屈しない心を育てている。彼女たちは自分のおかれた状況や周囲の環境を学び知り、同時に様々な技術を習って、自分の村や近隣の村の人々をたすける人材になる。シスターチャンドラはこのように、250人以上の少女たちをつつみこみ、大きな励ましをあたえ、人々に不正とたたかう勇気を与えてきた、指導者である。そのシスターチャンドラが少女たちの教育に、そして社会へのアピールの方法として注目したのが、先人の喜びや苦しみを伝えてくれる、人々の民俗芸能である。シスターチャンドラは、そのインタビューの中で、次のように語っている。

「少女たちを将来のリーダーとして養成していくなかで、気がついたことは、踊りや歌が、彼女達を育てるために、とても大きな役割をはたすということでした。どの村にもその村でさかんな歌やおどりがあったのですが、それらは徐々に消え去っていきともしています。私たちがとりくんだもっとも重要な芸能は、タッパアットム（あるいはパラリアットム）という太鼓舞踊です。またいろいろな歌にも、自分たちが伝えたい内容を歌詞としてもりこみました。いろいろな歌をうたうことで、少女たちも重要な人間の価値観を自然に学ぶことができたのです。例えば民俗舞踊の多くは、円となっておどります。円には深い意味がありますが、連帯や一つの力となるといったような意味をあらわします。ですからこうしたおどりをおどるだけで、私たちはともに手を取り、連帯していくのだ、私たちはひとつなのだという気持ちを、民俗舞踊を人々の前で演じることによって、与えることができます。つまり差別や階級、そして貧富の差などをこえて、人間は平等であることを、民俗舞踊は自然にしめしているのです。



ダリットは社会的な差別を多くうけますが、中でも女性はさらにひどい差別をうけることがままあります。ですから、私たちはこうしたダリットの女性の解放のために力をつくすことにきめたのです。死を象徴し穢れているとされた太鼓を、女性がもち舞踊として演奏すること自体が、革命的なことですし、劇として女性のおかれた悲惨な現状を演じてみせることで、人々に社会の不正義から目をそむけずに、これをしっかりみつめるようにさせたいのです。



シャクティのメンバーの中にはヒンドゥ教徒、イスラム教徒、キリスト教徒などがいます。今の世界は、宗教のちがいがから紛争がありますが、それらを

こえて、あらゆる人にとどくのはおどりや歌といった民俗芸能の力です。芸術はもっとも人間的のものともいえるでしょう。

ダリットの人たちがから習ったことですが、もっているものをわかちあたえることが、ダリットの人々には深いところから息づいています。自分の家には何もたべものがなくても、それでもお客さんを招きいれてくれようとしています。もし自分の家にお客さんがきているのに自分の家に食べ物がないければ、あいているとなりの家の台所に自由に入出入りして、いつでも食べ物を自由にもっていいのです。その家の人はあとでまた料理すればいいと、ダリットの人々はこれを行っているのです。こうした普遍的な価値を私はダリットの人たちから教えられており、これこそ私が人々に伝えなくてはいけない価値なのです。」

こうした言葉を実際に生きてきたチャンドラさんが来日に際して、下記のような行事が予定されている。詳細は国際識字文化センター (iclc2001@gmail.com, taeko-k@mse.biglobe.ne.jp) 担当黒川 までお問い合わせください。

シスターチャンドラの講演会やシャクティの南インド（タミル）民俗舞踊公演のおしらせ

- 11月11日（火） 「シスターチャンドラとシャクティの踊り手たち」
ータミル民俗舞踊公演と映画上映
第1回 午後3時開演 第2回 午後6時半開演
於 東京青山 東京ウィメンズプラザホール
入場料 3000円
- 11月12日（水） 「シスターチャンドラとシャクティの踊り手たち」
ータミル民俗舞踊公演と映画上映
第1回 午後3時開演 第2回 午後6時半開演
於 東京青山 東京ウィメンズプラザホール
入場料 3000円
- 11月17日（月） 「ダリット女性の教育と民俗芸能」
ーシスターチャンドラの講演会と民俗舞踊
午後6時半開演 於 東京虎ノ門 海洋船舶ビル10階
入場料 1500円
- 11月20日（木） インド民俗太鼓生演奏によるインド舞踊「さびしいキツネ」
午後7時開演 於 東京足立区 竹ノ塚区民ホール
入場料 1500円